

コミュニケーションの理解における認知的複雑性について

戸口愛泰*

Cognitive Complexity on the Understanding of Communication

Yoshiyasu Toguchi*

Abstract

The main purpose of this study was to conduct an effectiveness analysis on the class of communication for the freshmen. 58 students who took the 1st (pre-test) and 15th (post-test) classes were subjected for a questionnaire. According to the t-tests, the post-test scored higher than the pre-test on the self-evaluation of one's communication ability and comprehensive level. Also, a qualitative measure revealed that the post-test scored more words in explaining communication than the pre-test. After 3 months of lectures by various members of the same department, students have developed their cognitive complexity in understanding communication as a concept.

キーワード

コミュニケーション、認知的複雑性、効果測定

Key words

Communication, Cognitive Complexity, Effectiveness Analysis

I 目的

昨今、社会人基礎力やグローバル人材をキーワードにコミュニケーション能力の高い学生の創出が高等教育機関において余儀なくされている。しかし、コミュニケーション能力の発達には、児童期の社会的要因（家庭、学校、友人との集団活動など）（深田ら、1999）が強く寄与すると考えられ、大学で実施される初等教育の効果性に対する懐疑的な見方も否めない。そもそもコミュニケーションとは、人間社会で生存し、適応し、人として成長することを目的とした基本的ツールであり、成人してからはじめて使用方法を学ぶものではない（渡邊・渡辺、2011）。しかし、大学への入学以前にコミュニケーションの真意やその有用性についての学問的理解を深める機会は乏しいとも考えられる。人間科学部心理

*とぐち よしやす：大阪国際大学人間科学部准教授（2013.11.7受理）

コミュニケーション学科では、長年、大学生のコミュニケーション能力向上を目的とした演習プログラムや課題解決型学習（PBL）を推進する特別プログラムが実施されており（石井ら、2010；小牧ら、2011）、同様のプログラムの有効性が医学部生（高塚ら、2012）や看護学部生（森谷ら、2011）を対象にした知見においても報告されている。本学科では平成24年度から助成を受け、新たに1・2年次の学生を対象とする初等教育プログラムを展開しており、プログラムの一環として、オムニバス型授業として取り組む「コミュニケーション論（25年度前期開講）」の教科書を発行し、コミュニケーションについての理解を深めてもらう試みを行っている。本研究では、授業と教科書を通してコミュニケーションについての知識を獲得することが学生自身のコミュニケーションに対する認知的複雑性を向上させ、より深いコミュニケーションの理解につながるのと考えるのもと、授業の効果測定を実施した。

Ⅱ 方法

調査協力者

「コミュニケーション論」を受講している心理コミュニケーション学科1回生に調査を依頼し、1回目と15回目の授業を両方受講した58名（男性23名、女性34名、不明1名）の調査結果を分析対象とした（調査時期：2013年4月と7月）。学生の平均年齢は18.24歳（ $SD=0.51$ ）であった。

調査内容

- ① コミュニケーション能力についての自己評価（50点満点、プレ・ポスト）
- ② コミュニケーションについての理解度（50点満点、プレ・ポスト）
- ③ コミュニケーションについての記述数（最高5つ、プレ・ポスト）
- ④ コミュニケーションについての自由記述（プレ・ポスト）
- ⑤ 教科書が役立つかについての自由記述（ポストのみ）

Ⅲ 結果

まず、①の自己評価得点について、授業期間開始時（プレ）と授業期間終了時（ポスト）における対応のある t 検定を行ったところ、5%水準の有意差が確認できた（ $t(56)=2.576$, $p<0.05$ ）。プレの平均値は23.91（ $SD=13.86$ ）であり、ポストの平均値が29.00（ $SD=12.90$ ）であったため、ポストの方が明らかに自己評価得点が高くなっていることが判明した。また、②の理解度得点について、同様の分析を行ったところ、0.1%水準の有意差が確認された（ $t(56)=4.751$, $p<0.01$ ）。プレの平均値は20.70（ $SD=11.10$ ）であり、ポストの平均値は29.12（ $SD=10.36$ ）となった。理解度得点においても、ポストの方の平均値が明らかに高いことが認められた。これらのことから、授業期間開始時から3ヶ月間でコミュニケーション能力の自己評価と理解度において向上がみられたといえる。もちろん成長が著しく果敢な時期であるため、大学という教育機関に所属したことによる全人的な成長の影響も考えられるが、コミュニケーションに特化した理解度の促進においては、授業の効果があつた

と考えられる。

次に、③のコミュニケーションについての記述数に関してであるが、これは短時間に5つまでコミュニケーションについての印象を簡潔に記述してもらう設問であり、一般的に記述対象について具体的に思慮したことがない場合、5つまで記述するのは難しく、また内容も安易なものになりがちである。ある対象に対する認知がどの程度分化しているかを表す概念に「認知的複雑性」がある。これは物事をどの程度多次的に認知するか、難しいことを難しいまま認知できるかを判別する概念であり、特性変数の一つとして利用されているのが一般的である（山口・久野、1994）。本研究では、この概念を用い、3ヶ月後にコミュニケーションに関する記述が増加することで学生の認知的複雑性が高まり、より多次的にコミュニケーションの理解が深まったと解釈する。③の記述数について、プレとポストにおける対応のある *t* 検定を行ったところ、有意差は確認されなかった ($t(57) = .710, n.s.$)。プレの平均数は4.03 ($SD=1.36$) であり、ポストの平均数は4.17 ($SD=1.27$) となったことから統計的变化は認められなかった。しかし、両者の相関分析を行った結果、 $r=.371 (p<.01)$ と低い正の相関が認められた。このことから、時系列的理解のもと、ポストの記述数の方がプレよりも相対的に増加する傾向にあることがわかる（プレよりも低減することはない）。

さらに、上記6つの変数の相関関係を検討した結果、自己評価得点のプレ・ポスト間で正の弱い相関 ($r=.381, p<.01$) が、同様に理解度得点のプレと自己評価得点のポスト間で正の弱い相関 ($r=.392, p<.01$) が確認された (Table.1 参照)。これらのことから一般的にポストの方がプレよりも点数が上がる関係にあることが分かる。また、プレのコミュニケーションの理解度が高いほど、ポストのコミュニケーション能力についての自己評価が高くなる傾向が見られたことから、3ヶ月の授業期間後であっても、もともとのコミュニケーションの理解度が能力評価に影響を与えていることが伺える。また、同時期において、プレの自己評価・理解度間に正の高い相関 ($r=.702, p<.001$) が、同様にポストの自己評価・理解度間に正の高い相関 ($r=.720, p<.001$) が確認され、能力の自己評価と理解度との間には密接な関連があり、整合性があることが認められた。コミュニケーション能力に自信のある人は、コミュニケーション自体の理解に関しても高評価であると考えられる。

Table. 1 相関分析結果の一覧

	①プレ	②プレ	③プレ	①ポスト	②ポスト
①自己評価プレ	-				
②理解度プレ	.702***	-			
③記述数プレ	.137	.106	-		
①自己評価ポスト	.381**	.392**	.121	-	
②理解度ポスト	.142	.224	-.005	.720***	-
③記述数ポスト	.116	.173	.371**	.297*	.230

*= $p<.05$, **= $p<.01$, ***= $p<.001$

④のコミュニケーションについての自由記述から同義語（話せる、話す、話しかける、

話し合いなど)や認識不用語(コミュニケーション、とる、できるなど)を除外し、テキスト処理を行った結果、プレからは388語が、ポストからは412語が抽出された。本研究ではそれぞれ発言回数3回以上の単語を用い、プレからは総出語数の63.7%にあたる247語(24単語)、ポストからは総出語数の58.7%にあたる242語(29単語)を用いた。最も出現数が多かったのは「人」(プレ53回、21.5%;ポスト32回、13.2%)、ついで「話す」(プレ34回、13.8%;ポスト30回、12.4%)、「相手」(プレ20回、8.1%;ポスト22回、9.1%)、プレの第4位に「話す」(12回、4.9%)と「大事」(12回、4.9%)、ポストの第4位に「自分」(14回、5.8%)と「関わる」(14回、5.8%)などが続く。プレにおいて、コミュニケーションとは人と話すことであり、生きる上で重要な作業であることが伺える。ポストにおいても同様のことが指摘されているが、自分が人と関わることもコミュニケーションには重要のようである。また、性別による総出語数の変化に注目すると、男性(23名)はプレの146語からポストの165語に、女性(34名)はプレの242語からポストの247語に語数が変化しており、男性において顕著な増加が確認できた。③の記述数においてはプレ・ポスト間の有意差は見られなかったが、本分析からは各記述内容の単語数が増えたと解釈することがで

Table. 2 出語と性別によるクロス表(発言回数3回以上)

プレ出語				ポスト出語			
	男性	女性	合計		男性	女性	合計
1 人	18	35	53	1 人	8	24	32
2 話す	13	21	34	2 話す	9	21	30
3 相手	5	15	20	3 相手	2	20	22
4 生きる	6	6	12	4 自分	8	6	14
4 大事	1	11	12	4 関わる	6	8	14
6 自分	4	7	11	6 知る	4	8	12
6 知る	7	4	11	6 生きる	8	4	12
6 必要	4	7	11	8 必要	5	5	10
6 関わる	2	9	11	8 大事	0	10	10
10 つながり	1	9	10	8 つながり	3	7	10
11 関係	7	2	9	11 関係	2	5	7
12 接する	5	2	7	12 社会	1	5	6
13 気持ち	1	5	6	12 気持ち	2	4	6
13 理解	2	4	6	14 聞く	2	3	5
15 考え	0	5	5	14 人間	4	1	5
16 交流	3	1	4	16 力	4	0	4
16 つなげる	1	3	4	16 意見	1	3	4
17 聞く	1	2	3	16 交流	1	3	4
17 方法	2	1	3	16 楽しい	2	2	4
17 ネット	3	0	3	16 理解	1	3	4
17 生活	1	2	3	21 接する	3	0	3
17 交換	0	3	3	21 広がる	0	3	3
17 話	2	1	3	21 知れる	0	3	3
17 深める	1	2	3	21 人生	2	1	3
				21 文化	2	1	3
				21 生活	0	3	3
				21 誰	2	1	3
				21 情報	2	1	3
				21 深める	1	2	3
合計	90	157	247	合計	85	157	242

きる。男性のみにあってはあるが、授業期間終了後においてコミュニケーションの印象についての複雑さが増し、より多くの語彙を用いて説明することができたのである。

さらにTable.2に着目すると、男性において特徴的なのは、「自分」が4回（プレ）から8回（ポスト）に、「関わる」が2回（プレ）から6回（ポスト）に増加している。これらの記述から発信者としての自分と、受信者として他者と関わることの必要性がより認識されたと考えられる。また、女性においてはもともとの総出語数が多いことも原因として考えられるが、「相手」と「大事」といった出語が男性に比べ多く記述されていた。女性の方がコミュニケーション能力に長けているといわれる中、その理由としてコミュニケーションの相手とその関係性について男性よりも重要視しているのかも知れない。上位11位までの出語はプレ・ポスト間で同じ結果となったが、12位以降からは出語が拡散している。ポストにおいては語彙が増え、より多面的にコミュニケーションを理解している結果といえる。

最後に⑤の教科書についての自由記述について、上述と同様のテキスト処理を行った結果、265語が抽出された。本研究では発言回数3回以上の単語を用い、総出語数の46.4%にあたる123語（23単語）を用いた。「分かる」（17回、13.8%）、「知る」（13回、10.6%）といった上位語句から教科書がコミュニケーションの理解・知識獲得につながったことが指摘される（Table.3参照）。しかし、テキスト分析では文脈の理解に乏しく、Table.4にて自由記述例を記載する。

Table. 3 出語と性別によるクロス表（発言回数3回以上）

	出語	男性	女性	合計
1	分かる	4	13	17
2	知る	2	11	13
3	教科書	2	5	7
3	読む	1	6	7
5	話す	0	6	6
5	授業	4	2	6
7	欠く	1	4	5
7	勉強	2	3	5
7	内容	0	5	5
7	先生	1	4	5
7	様々	2	3	5
7	理解	1	4	5
13	自分	1	3	4
13	人	3	1	4
13	色々	1	3	4
13	見る	1	3	4
17	聞く	1	2	3
17	出合い	1	2	3
17	今	0	3	3
17	おもしろい	0	3	3
17	分野	1	2	3
17	いろいろ	0	3	3
17	話	1	2	3
	合計	30	93	123

Table. 4 教科書についての自由記述

- ✓内容がたくさんあって、その中には自分が興味があるものももちろんあり、こうすれば、コミュニケーションがとれるのかと考えさせられる部分もありました。
- ✓コミュニケーションのはいけいに宗教や文化などがあることが分かったし、現在のコミュニケーションの状況もわかった。
- ✓色々なコミュニケーションについて知ることができたから。
- ✓役に立った部分もありましたが、内容が少し難しかったところもありました。でも、「コミュニケーション」という言葉1つを取っても、いろんな、見方があるんだなと思いました。
- ✓コミュニケーションがどのようなものなのか、どんなものなのかを知ることができたから。コミュニケーションの方法を知ることができた。
- ✓コミュニケーションと言っても色々なものがあるってそれについて様々な角度から見ている物だったので教科書は勉強になった。
- ✓例を挙げられていたので理解しやすかったです。
- ✓高校生活ではコミュニケーションについてなんてあまり勉強しなかったの、教科書という形で勉強できるものができてとても興味がもてた。
- ✓ボクの好きなやつは旅の事を取り上げてたやつです。それはこれからボクも旅するのが好きなので参考になりました。
- ✓授業を通して理解できたと思います。特に旅先での「出会い」の授業は楽しく学習できました。
- ✓どの先生がどの分野からコミュニケーションについて教えてくださるか、分かるから。
- ✓たくさんの教員のコミュニケーションの話を聞いていろんな視野からのコミュニケーションが新たに発見できたから。
- ✓様々な知識がたまっていて後から読み返しても学ぶことがある。
- ✓マーケティングの授業内容は自分のものになったと思います。人はコミュニケーションをしないと生きていくのは無理だと改めて思いました。
- ✓講義を受けながら該当するページにメモがとれて、後で見直しても講義の内容を思い出せる。
- ✓企業のコミュニケーションなど、この教科書を読むまで全然しなかったから、今まで自分が知らなかったコミュニケーションを知ることができたから。
- ✓図や絵が効果的に入っていて、分かりやすかったし、見やすかった。各章の説明も分かりやすく、読みやすかった。
- ✓コミュニケーションにおいて大事なことや意味がよくわかってきたように感じました。
- ✓今まで、知らなかった分野についても勉強することができた。特にビジネス系について勉強できた。
- ✓授業するにあたって、教科書を参考にしながら聞いていたので。そして写真がついてたり、心ちゃん理ちゃんとの会話とか見てわかりやすかったです。
- ✓人と人とのつながりや経験などその個人的な意見や他角てきな視野を広められた授業になりました。
- ✓コミュニケーションでも場所によって、話す内容が変わっていて、読んでいてもおもしろいと思った。
- ✓授業を聞いているだけではわからない事なども、教科書があれば何度も理解するまで読みこむことができるから。日常の会話みたいに表現してあったので、感覚的に理解しやすかったし、絵とかもいっぱいあって見やすかったからです。
- ✓コミュニケーションと言っても色々なものがあるってそれについて様々な角度から見ている物だったので教科書は勉強になった。ひとくくりにしても多くの種類があることを知ったし、各先生がどんなコミュニケーションのことを教えてくれるのかが、心ちゃんと理ちゃんが話してるページで分かりやすく書いていて理解しやすかったです。

コミュニケーションの理解における認知的複雑性について

- ✓様々な側面から見た「コミュニケーション」というものの入口が分かりやすく書かれてあったため。
- ✓様々な面からのコミュニケーションを知ることが出来き、色々な分野があることを知り、それぞれをもっと深く学びたいと思うきっかけになってよかったです。
- ✓赤ちゃんと母親の話しの回が、興味深かったし、役にたったと思う。また、いろんな「コミュニケーション」がのっているのが、コミュニケーションのことについて学べたと思うから。
- ✓これからの人との接し方を考えるきっかけとなった。これからのコミュニケーションをとる時について初めて自分の行動を見返して改善することが出来た。
- ✓いろんな知らないコミュニケーションを知ることが出来たから。

上記の自由記述例では、教科書が役立った理由として「複数担当教員による内容の多様性」、「理解のしやすさ」、また「コミュニケーションについて知らなかったことが知れた（知識の獲得）」などが主に触れられていた。これはオムニバス型授業の特色であり、担当教員全てがコミュニケーションというテーマのもと各自の専門分野の紹介を行った成果と考えられる。はじめたばかりの大学生活において、所属する学科教員の存在を確認でき、その専門性を教科書から読み解くことで副次的ではあるがより親近感を持ってもらえたのではないだろうか。もちろん、担当教員によって授業形態も異なり、教科書を常時使用しながら解説を行う教員は少数派であったため、学生側に多少の混乱が生じたとは想定されるが、コミュニケーションについての認知的複雑性を高める上で、オムニバス型授業とオリジナル教科書の使用は肯定的な影響を及ぼしたと考えられる。

Ⅳ 考 察

本研究の結果、授業開始時から終了時までの3ヶ月間において、コミュニケーション能力・理解に対して改善が見られ、特に男性においてはコミュニケーションに対する認知的複雑性が高まったといえる。もともと能力・理解度の高かった女性においても成長は見られたが、男性の方がその伸び幅においてより顕著だったのではないだろうか。オムニバス型授業とオリジナル教科書の相乗効果によって、コミュニケーションについての理解の最適化が促されたといえるだろう。しかし、コミュニケーションについての理解が促進しても、その重要性に対する学生の意識が低ければ、高コミュニケーション能力の学生を輩出するための継続した取り組みは意味を成さない。その懸念を払拭する上でも、コミュニケーションの重要性認知に関するさらなる検討が必要と考える（戸口、2014）。また、コミュニケーション能力とは単なる自己評価だけで測れるものではなく、他者からの客観的指標が相俟って認知のズレが抑制され、より客観的な能力評価（ひいては自尊心向上）へとつながるものと考えられる。学生がコミュニケーションに興味をもち、重要であると認知し、他者からの適切なフィードバックを受けることができれば、コミュニケーション能力の発達を促す継続した取り組みもその重要度が増すことであろう。

注

本稿は、平成24年度大阪国際大学特別研究費（教育研究助成）において、「人間科学部心

理コミュニケーション学科の多彩な学びを多様な学生へー学科教育研究資源の融合化とイメージ化ー」として採択されたプログラムの報告書に修正を加えたものである。

引用文献

- 深田博己（編）（1999）. 『コミュニケーション心理学』、北大路書房.
- 石井滋・小牧一裕・森上幸夫・青野明子・戸口愛泰・林幸史（2010）. 大学生の対人関係能力と大学生活への適応に関する検討、日本社会心理学会第51回大会論文集、290-291.
- 小牧一裕・戸口愛泰・林幸史・青野明子・森上幸夫・石井滋（2011）. 対人コミュニケーションプログラムの効果と大学適応との関連性、日本社会心理学会第52回大会論文集、294.
- 森谷利香・九津見雅美・池田七衣・竹村節子（2011）. 看護系大学生の学習意欲とコミュニケーション能力に関する研究、千里金蘭大学紀要、8、191-199.
- 高塚人志・中野俊也・白石義光・高橋洋一・入澤淑人・黒沢洋一・河合康明・吉岡和子（2012）. 鳥取大学医学部におけるヒューマン・コミュニケーション授業の効果：コミュニケーション能力及び自尊感情への自己評価の変化に注目して、米子医学雑誌、63、82-97.
- 戸口愛泰（2014）. コミュニケーションの重要性認知についての質的検討、日本社会心理学会第54回大会論文集、416.
- 山口陽弘・久野雅樹（1994）. 認知的複雑性の測度に関する多面的検討、東京大学教育学部紀要、34、279-299.
- 渡邊忠・渡辺三枝子（2011）. 『コミュニケーション力』、社団法人雇用問題研究会.